

斯ノ如キ誤謬ニ陷リツ、清韓兩廷共ニ平壤黃海ノ戰終ル
マテハ毫モ之ヲ覺リ得サリシハ誠ニ是非モナキ次第ナリ
第二章 朝鮮ニ向テ日清兩國軍隊ノ派遣
其後政府ハ六月四日京城發杉村臨時代理公使ノ來電ニ據
リ同公使カ袁世凱ニ面會シテ朝鮮政府ヨリ愈援兵ヲ清國
ニ請ヒ清國政府其請求ヲ容レ若干ノ軍隊ヲ朝鮮ニ送ルヘ
シトノコトヲ確聞セシトノコトヲ知リ又六月五日頃ヨリ
在天津荒川領事ハ外務省ヘ在北京公使館附武官神尾陸軍
少佐ハ參謀本部ヘ各清國政府カ天津ニ於ケル出師準備ノ
模様ヲ電報シ來リ或ハ清國軍隊若干ハ某ノ日ヲ期シ大沽
ヨリ仁川ニ直航スヘシト云ヒ或ハ直ニ山海關ヲ經テ陸行
スヘシト云ヒ又ハ軍需若干ヲ搭載シタル清國運送船ハ現
ニ大沽ヲ出帆シツ、アリト云ヒ凡ソ此類ノ電信ヲ接手ス
ル一日數回ニ及ヒ殊ニ在北京臨時代理公使小村壽太郎ヨ
リ清國政府カ愈朝鮮國ニ出兵スルノ議ヲ決シタル模様確

實ナリトノ電報達シタレハ朝鮮政府カ其内亂ヲ鎮壓スル
能ハスシテ外援ヲ清國ニ請ヒ清國政府ハ時機ヲ失ハス出
師準備ヲ爲シ居リ或ハ既ニ多少ノ軍隊ヲ派出シタルヤモ
計ラレストノ事實ニ付テハ最早毫モ疑ヲ容ルヘキナク從
テ之ニ對シ外交及軍事上ノ運動ハ片時モ怠ルコトナク先
ツ清國政府ニ於テ果シテ天津條約ニ據リ其朝鮮ヘ派兵ス
ルコトヲ我國ヘ行文知照スルヤ或ハ今回ノ出兵ハ全ク朝
鮮國王ノ請求ニ據ルトイフ口實ヲ設ケ該條約ヲ遵守セス
恣ニ出兵ヲ行フヤノ事實ヲ確メムトシタリ勿論清國政府
カ天津條約ニ從ヒ其朝鮮ヘ派兵スルコトヲ我政府ニ行文
知照スルト否トニ關セス苟モ清國政府ニシテ朝鮮國ニ軍
隊ヲ派出スルコト確實ナル上ハ日本モ亦朝鮮ニ於ケル日
清權力ノ平均ヲ保持スルカ爲メニ相當ノ軍隊ヲ同國ヘ派
出スルコト勿論ナリトハ廟算ノ既ニ定ムル所ナレトモ同
時ニ我ハ常ニ被動者ノ地位ニ立タムコトヲ欲シ且ク清國

政府カ果シテ天津條約ニ對シ如何ナル針路ヲ執リ來ルヤ
ヲ確知スルヲ甚タ必要ナリトシ日夜清國ノ舉動ヲ視ヒ居
レリ
爰ニ何故ニ清國政府カ朝鮮ヘ軍隊ヲ派山スルニ付キ果シ
テ天津條約ヲ實行スルヤ否ヲ疑ヒシトナラハ抑日清兩國
カ朝鮮ニ於ケル關係ハ從來殆ト氷炭相容レサル主義ニ基
キ居タルモノアリ明治六年ノ頃當時ノ外務卿副島種臣カ
特派全權大使トシテ清國ニ派遣セラレ北京ニ滞在セシ時
清韓宗屬ノ關係ニ付キ總理衙門王大臣等ト一二ノ談話ヲ
交ヘタルコトアリタル由ナレトモ公文明約ノ存シテ以テ
日清兩國政府ノ間ニ効力ヲ有スル如キモノハ一モアルコ
トナク又明治九年黒田全權辦理大臣井上副大臣ヲ朝鮮ニ
派遣シ今ノ日韓修好條約ヲ訂結スルニ當リ我國ハ直ニ朝
鮮ヲ確認シテ一個ノ獨立國トシ朝鮮モ亦之ニ應シテ自ラ
獨立國トシテ同條約ヲ訂結シタレトモ日本政府ハ清國ト

朝鮮トノ間ニ存スル曖昧ナル宗屬ノ關係ヲ分明ニスルノ
必要ヲ感シタルヨリ是ヨリ先キ特命全權公使森有禮ヲ北
京ニ派遣スルニ臨ミ同公使ニ訓令シ就任後此事ニ付キ總
理衙門ニ商議セシメタルニ其間彼此往復ノ公文ハ積ムテ
卷ヲ爲スニ至リタルモ其結果ハ清國政府ハ一面ニ於テ朝
鮮ハ内治外交トモ其自主ニ任ス故ニ朝鮮ニ起リタル事件
ニ付テハ直接ニ其責任ヲ執ラスト云ヒナカラ他ノ一面ニ
於テハ朝鮮ハ尙ホ中國ノ屬邦ニシテ決シテ一個獨立ノ王
國ト認ムル能ハストイフカ如キ前後矛盾ノ屬邦論ヲ主張
シタルノミ當時我政府ハ直ニ之カ爲メニ清國ト葛藤ヲ生
スルコトヲ避ケ唯國際公法上普通ノ見解ニ據ル所謂宗國
ト屬國トノ關係ヲ説明シ清國カ朝鮮國ヲ以テ其屬邦ト稱
シナカラ其内治外交ニ干預スル能ハストイフハ畢竟屬邦
タリトノ空名ヲ擁シテ宗國タルノ責務ヲ避ケムトスルニ
在ルヲ以テ我國ニ於テハ朝鮮國ヲ一個獨立ノ國ト確認シ

一切ノ責任ヲ其國ノ政府ニ負ハシメサルヘカラスト主張シタレトモ元來清國政府ト事ヲ商定スルハ曾テ英公使サ、ハリー、バアクス「カ比噓」タル如ク無底ノ釣瓶ヲ以テ井水ヲ汲ムカ如ク何時モ其効ナク本件ノ商議モ遂ニ何等ノ結局ヲ見ルニ至ラス言ハ、水掛論ノ形トナリ依然未了ノ問題トシテ徒ニ公文ヲ雙方ニ留メタルノミ去レハ明治十七年京城變亂ノ翌年今ノ伊藤内閣總理大臣カ當時參議兼宮内卿ヨリ特派全權大使トシテ清國ニ派遣セラレ所謂天津條約ヲ訂結スル迄ハ朝鮮ニ關スル日清兩國ノ權利ニ付テ彼我ノ間ニ何等ノ約定モアラス我ハ我明治九年ノ日韓修好條約ニ據リ朝鮮ハ一個ノ獨立國ナリト主張シ清國ハ依然トシテ朝鮮ハ中國ノ屬邦ナリト固執シ互ニ相下ラサリシ有様ナリシ天津條約ハ無論ニ當時朝鮮ニ於ケル日清兩國ノ軍隊衝突ノ善後ヲ策スルモノナルカ故ニ之ニ據テ清韓宗屬ノ關係ヲ確定スヘキ明白ノ條款ハナケレトモ同

條約ニ於テ日清兩國ハ同時ニ朝鮮國ニ駐在スル軍隊ヲ撤回スヘキコトヲ約シ又將來朝鮮ニ事變アリテ日清兩國中何レノ一國ニテモ朝鮮ニ軍隊ヲ派出スルトキハ互ニ行文知照スヘシト定メタルハ兎ニ角兩國カ朝鮮ニ對スル均等ノ權力ヲ示シタル唯一ノ明文ニシテ之ヲ除キテハ朝鮮ニ對スル權力平均ニ就キ日清兩國ノ間ニ何等ノ保障タモ存ズルコトナシ尤モ此天津條約ニ付テハ爾來我國ニ於テ多少ノ非難ヲ試タルノ論者ナキニ非スト雖モ清國政府カ常ニ已ノ屬邦ナリト稱スル朝鮮ニ駐在セル軍隊ヲ條約上ヨリ撤回セサルヲ得サルニ至リタルノミナラス將來如何ナル場合ニ於テモ同國ノ軍隊ヲ派出セムトスルトキハ先ツ日本政府ニ行文知照セサルヘカラストノ條款ヲ具スル條約ヲ訂結シタルハ彼ニ在テハ殆ト一大打擊ヲ加ヘラレタルモノニシテ從來清國カ唱ヒ居タル屬邦論ノ論理ハ之カ爲メニ大ニ其力ヲ減殺セシコトハ一點ノ疑ヲ存セス去レ

ハ今回ノ朝鮮事件進行スルニ及テ英國政府カ最初ニ居中
調停ヲ試ムトシタルトキニモ亦後ニ日清兩國政府ノ間ニ
一旦破談トナリタル共同委員說ノ再興ヲ慫慂シ來リ我政
府ハ之ニ對シテ將來ハ兎モ角モ今日迄既ニ日本ノ獨力ヲ
以テ朝鮮政府ニ勸告シ同政府モ之ニ同意ヲ表シ居ル改革
事項ニ付テハ最早清國ト何等ノ協議ヲナス必要ナシト答
ヘタルトキニモ英國政府ハ恰モ朝鮮ノ事ニ付テハ一切日
清兩國ノ間ニ平衡ヲ保ツヲ以テ天津條約ノ精神ト認メ居
タルモノ、如ク後段帝國政府ノ回答ニ對シテ痛ク天津條
約ノ精神ヲ度外視シタルモノナリト咎メ又其後在韓ノ日
清兩國軍隊カ韓ノ南北部ヲ共同占有シ徐ニ日清兩國ノ調
和ヲ計ルヘシト勸告シ來リタルカ如キモ亦同一ノ根據ニ
出テタルカ如ク天津條約ノ正解トシテハ全ク之ヲ誤リタ
ルモノナレトモ同條約カ日清兩國ノ朝鮮ニ於ケル權力平
均ニ付キ如何ニ諸外國政府ニ重視セラレ居タルカハ以テ

察スルニ足ルモノアリ余カ今回ノ事件ニ對シ派兵ニ付キ
互ニ行文知照スヘシトノ規定アル外他ニ何等直接ノ關係
ヲ有セサル天津條約ノ解釋ヲ斯迄ニ詳述シタルハ同條約
訂結ノ後日清兩國政府カ朝鮮ヘ出兵スルニ至リタルハ實
ニ今回ノ事件ヲ以テ始メトシ而シテ清國政府ハ果シテ此
天津條約ニ從ヒ我政府ニ行文知照スルヤ否ヲ確知スルコ
トハ現在及將來ニ向ヒ我カ清國ニ對スル外交上最モ緊切
ナリト思考シタレハナリ
右ノ如ク我政府ハ一方ニ於テハ何時モ朝鮮ニ向ヒ軍隊ヲ
派遣スルニ差支ナキ丈ニ山師ノ準備ヲ急キツ、他ノ一方
ニ於テハ清國政府カ如何ニ天津條約ヲ實行スルヤヲ窺ヒ
ツ、アリタルニ在東京清國特命全權公使汪鳳藻ハ明治二
十七年六月七日附公文ヲ以テ其政府ノ訓令ト稱シ同國カ
朝鮮國王ノ請求ニ對シ東學黨鎮壓ノ爲メ若干ノ軍隊ヲ朝
鮮ニ派出スル旨ヲ照會セリ出兵ノ行文知照トシテハ無用

清國政府ヨリ朝鮮
ニ派兵スルコト
ニ付キ我政府
ニ對スル公文知照

清國政府ノ公文
ニ在ル「保護屬邦」
ノ語ニ對スル帝國
政府ノ抗議
帝國政府ヨリ朝鮮
國ヘ派兵スルコト
ニ付キ清國政府ニ
對スル公文知照

ノ議論ヲ費シ其間稍傲慢ノ語辭ヲ存シタレトモ其書中「我
朝保護屬邦舊例」ノ一句ヲ除クノ外ハ今ハ其文句上ニ爭議
ヲ試ルノ秋ニ非ス故ニ我政府ハ直ニ之ニ照復シ清國政府
カ天津條約ノ第三款ニ從ヒ朝鮮ヘ軍隊ヲ派出ノ爲メ行文
知照ノ趣ハ帝國政府ニ於テ直ニ承知セリ但シ其書中「保護
屬邦」ノ語アレトモ帝國政府ハ未タ曾テ朝鮮國ヲ以テ清國
ノ屬邦ト認メ居ラストノ抗議ヲ附言シタリ
今ヤ政府ハ清國政府カ天津條約ニ遵行シタルヲ見タリ最
早一刻片時モ待ツヘキ必要ナシ余ハ即夜在北京臨時代理
公使小村壽太郎ニ電訓シ朝鮮國現ニ變亂重大ノ事件アリ
我國ヨリ若干ノ軍隊ヲ同國ニ派出スヘシ天津條約ノ規定
ニ從ヒ之ヲ行文知照スト言ハシメタリ我政府ノ照會ハ單
ニ天津條約ノ規定ニ從ヒ派兵ノ事ヲ知照スルニ止マリタ
ルモノナルカ故ニ之ヲ清國政府ヨリ我政府ニ致シタル照
會ニ比スレハ頗ル簡明ナリシニ拘ラス總理衙門ハ右照會

ニ對シ清國ハ朝鮮ノ請ニ依リ援兵ヲ派シ其内亂ヲ裁定ス
ル爲メ即チ屬邦ヲ保護スルノ舊例ニ依ルモノナルカ故ニ
内亂平定ノ上ハ直ニ之ヲ撤回スル筈ナリ然ルニ日本政府
派兵ノ理由ハ公使館領事館及商民ヲ保護ストイフニ在レ
ハ必スシモ多數ノ軍隊ヲ派出スルヲ要セサルヘク且ツ朝
鮮政府ノ請求ニ出テタルニ非サレハ斷シテ日本軍隊ヲ朝
鮮内地ニ入込マシメ人民ヲ驚駭セシムヘカラス又萬一清
國軍隊ト相遇フトキニ當リ言語不通等ノ爲メニ或ハ事ヲ
生セムコトヲ恐ル、カ故ニ此旨日本政府ヘ電達アリタキ
旨ヲ同代理公使ニ要求シ小村ハ直ニ此趣旨ヲ電稟セリ然
ルニ我政府ハ天津條約ノ規定ニ從ヒ朝鮮ニ出兵スルコト
ヲ行文知照スルノ外清國ヨリスル何等ノ要求ニモ應スヘ
キ理由ナキヲ以テ更ニ小村ヲシテ清國總理衙門ニ向ヒ第
一ニ清國カ朝鮮ニ軍隊ヲ派出スルハ屬邦ヲ保護スル爲メ
ナリトイフト雖モ我政府ハ未タ曾テ朝鮮ヲ以テ清國ノ屬

邦ト認メタルコトナク又今回我政府カ朝鮮ニ軍隊ヲ派出
スルハ濟物浦條約上ノ權利ニ之レ依リ又之ヲ派出スルニ
就テハ天津條約ニ照準シテ行文知照シタルノ外我政府ハ
自己ノ行ハムト欲スル所ヲ行フニ在ルヲ以テ其軍隊ノ多
少及進退動止ニ就テハ毫モ清國政府ノ掣肘ヲ受クヘキ謂
ハレナシ又假令日清兩國ノ軍隊カ朝鮮國內ニ於テ彼此相
逢ヒ言語不通ナルモ我國ノ軍隊ハ毎ニ紀律節制ニ依テ進
動スルモノナレハ決シテ漫ニ衝突スルノ虞ナキハ我政府
ノ信シテ疑ハサル所ナリ故ニ清國政府ニ於テモ亦其軍隊
ニ訓令シテ事端ヲ生セサル様注意アリタシトノ旨ヲ回答
セシメタリ

是レ單ニ日清兩國カ既定ノ條約ニ依リ朝鮮ニ軍隊ヲ派出
スルノ行文知照ノミ然レトモ彼ヨリノ照會ニ存スル保護
屬邦ノ文字ニ對シテハ我ハ既ニ默止スル能ハス而シテ我
ヨリノ照會ニ對シテハ彼亦數多ノ詰問ヲ試ムトセリ平和

未タ破レス干戈未タ交ラサルモ僅ニ一篇ノ簡牘中既ニ彼
我其見ル所ヲ同クセスシテ早クモ甲爭乙抗ノ狀態ヲ表シ
タル此ノ如シ別種ノ電氣ヲ含メル兩雲ハ已ニ正ニ相觸ル
其一轉シテ電擊雷轟トナルハ形勢ニ於テ甚タ明カナリ然
レトモ我政府ハ尙ホ此危機一髪ノ間ニモ成ルヘク現在ノ
平和ヲ破裂セシメスシテ國家ノ名譽ヲ全スルノ道ヲ求メ
ムトシ專ラ之ニ汲々シタリ

第三章 大島特命全權公使ノ歸任及其就任後ニ於ケ
ル朝鮮ノ形勢

我政府ハ外交上ニ於テ常ニ被動者ノ地位ヲ執ラムトスル
モ一旦事アルノ日ハ軍事上ニ於テ總テ機先ヲ制セムトシ
タルヲ以テ既ニ清國カ其軍隊ヲ朝鮮ヘ派遣スヘキノ事實
明確トナリタル上更ニ彼ヨリ形式上天津條約ニ據リ行文
知照シ來ルヲ待ツハ事情ニ於テ頗ル困難ナリシ之ニ反シ
清國カ其軍隊ヲ進退スルハ我ヨリモ一層ノ自由ヲ有シ單